

## NEWS LETTER

VOL.19  
JAN 2022

HRC-GH

## センター長 年頭のご挨拶

明けましておめでとうございます。

年頭にあたり、健康で希望に満ちた寅年となりますことを皆さまとともに祈念いたします。2021年も COVID-19 パンデミックが社会・経済・国際政治に大きな影響を与える一方、コロナ後の社会と秩序の構築を目指した論議が始まっています。その象徴が、2021年11月29日から12月1日までの間、Hybrid方式で開催されたWHO特別総会でした。2年ぶりにジュネーブを訪問し、WHO、Gaviなどの人事部長と面会し、採用方式などの進化について情報を収集してきました。2022年は、変わりつつあるグローバルヘルスの領域で我が国からの人材がますます活躍できるよう、私たちのセンターも皆さまへの支援を充実して参ります。

グローバルヘルス人材戦略センター ディレクター 中谷 比呂樹



竣工した WHO 本部新館。ロビーに掲げられているのは毛筆で書かれた健康を寿ぐ書。

## Go UN / Global - The Global Health Career Development Workshop for Japanese Professionals

国連・国際機関へ行こうー日本人専門家のためのグローバルヘルス・キャリア・ディベロップメント・ワークショップ

2021年12月12日(日)、グローバルヘルス人材戦略センター主催、WHO西太平洋事務局(WPRO)後援により標記ワークショップが開催され、158人の参加がありました。

午前中は、中谷センター長より国際保健の世界的潮流と保健人材、ジェフリー・コバザ管理・財務部長よりWHO概要、エレナ・ドルモット人事部長からWHO採用プロセス、ローラ・ダビソン渉外担当チーム・リーダーから履歴書の書き方、ヤング・アイ・リー人事担当より筆記試験の受け方について講演して頂きました。また、午後はドルモット人事部長及び

リー人事担当よりコンピテンシー・ベースド・インタビュー(CBI)の理論と実践についてご説明頂いた後、参加者はグループに分かれて、CBIに関するディスカッションを行いました。

2016年の開始から今年で6回目を迎えた本ワークショップ。今年は昨年に引き続きオンラインで実施するとともに、ニーズの高かった筆記試験の受け方について例年よりも多くの時間を割いて実施しました。このように、その時々状況や受験生のニーズに応じて最適な内容を考慮しつつ、引き続き本ワークショップを開催して参ります。

## 第6回国際臨床医学会学術集会シンポジウム

「コロナ時代のインバウンド・アウトバウンド医療で求められるグローバルヘルス人材とは」

2021年12月11日(土)、グローバルヘルス人材戦略センター主催で標記シンポジウムが開催され、170人の参加がありました。コロナ時代においては、世界水準の知見を持ち、グローバルな視点からリーダーシップを発揮できるグローバルヘルス人材の適材適所の配置が必要です。本シンポジウムでは、各界の専門家を迎え、コロナ禍及びポスト・コロナにおいて、インバウンド・アウトバウンド医療の分野で求められるグローバルヘルス人材について考えました。

当日は、地引英理子グローバルヘルス人材戦略センター上級研究員を座長に、中谷センター長より新しいグローバルヘルス時代に求められる人材の鳥瞰像をお話しました。続いて、北島千佳 Gavi ワクチンアライアンス資金調達担当上級マネージャーから、Gavi が事務局となっている、新型コロナワクチンの平等で迅速なアクセスを確保するための世界的イニシアチブ COVAX の仕組、活動、求められる人材について

お話し頂きました。次に杉浦康夫国立国際医療研究センター(NCGM)国際診療部長には、入国制限によるインバウンドの減少等、外国人診療の現状及び求められる人材について考察して頂きました。最後に、磯博康 NCGM グローバルヘルス政策研究センター長には、コロナ禍の今だからこそ、公衆衛生学、疫学、保健医療システム学、医療経済学、情報科学コミュニケーション学等の研究が重要であり、それらに求められる人材についてお話し頂きました。当日ご参加できなかった方のために、シンポジウムの動画をHPに掲載しました(<https://hrc-gh.ncgm.go.jp/event/archives/16>)。

参加者の皆様には、パネリストの話を通じて、コロナ禍における危機的な状況において、国際機関、国際診療、国際医療研究のそれぞれの分野で、今だからこそ求められる人材、ジョブ・オポチュニティがあることをご理解頂けたかと思えます。

## ■ 人材登録のお願い

1月1日現在、690名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっていきます。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲

載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。

<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



## 国際感染症分野のキャリアアップセミナー ―感染症に立ち向かうグローバルヘルス人材の拡大―

2021年11月12日(金)、国立感染症研究所感染症危機管理研究センターとの共催で標記セミナーが開催され、124人の参加がありました。本セミナーでは、新型コロナウイルス感染症を収束させ、次の感染症に立ち向かう基礎体力の強化が求められる中、感染症危機管理研究センターの公募ポストをはじめ様々な就職機会を紹介すると共に、この道を切り開いてきた専門家の方々のお話をお伺いしました。

当日は齋藤智也危機管理研究センター長を座長に迎え、中谷比呂樹グローバルヘルス人材戦略センター長、大曲貴夫国立国際医療研究センター国際感染症センター長、砂川富正国立感染症研究所実地疫学研究センター長、鈴木基国立感染症研究所感染症疫学センター長、杉原淳厚生労働省結核感染症課課長補佐、高橋里枝子厚生労働省東京検疫所東京空港検疫所支所検疫官より感染症危機においては、国内と国際の境界線がなくなりつつある中、感染症危機管理人材の求められるコ

ンピテンシーも従来よりも広がってきており、政策立案能力・調整能力・研究の強化等が求められていること等をご教示頂きました。また、国際機関ポスト、国立感染症研究所の新規ポスト、GOARN (Global Outbreak Alert and Response Network) ミッション、国立国際医療研究センター臨床ポスト、感染症研究所の疫学公衆衛生枠、厚生労働省の感染症危機管理専門家養成プログラム (IDES)、検疫医療専門職、国立感染症実地疫学専門家養成コース (FETP) 等の様々な就職・研修機会についてもご紹介頂きました。当日の配布資料は、HPでご覧頂けます (<https://hrc-gh.ncgm.go.jp/event/index/page:2>)。

感染症専門家として求められる能力・職種は多様化し、それだけ活躍の場も広がっていると言えるでしょう。当センターもこれらの機関と連携しつつ、引き続き国内外でご活躍される専門家の方々の育成と派遣のサポートをして参ります。

## グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったことでキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々にキャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させて頂いています。

第9回は、世界保健機関西太平洋地域事務所 (WPRO) 高齢化担当コーディネーターの岡安裕正氏です。

インタビューー 清水真理子

### 第9回



**世界保健機関西太平洋地域事務所 (WPRO)  
高齢化担当コーディネーター  
岡安 裕正** [おかやす ひろまさ]

1999年慶應義塾大学医学部卒業。1999年在沖縄米海軍病院インターン。2000年マッキンゼー・アンド・カンパニー東京オフィス勤務 (コンサルタント)。2005年スタンフォード大学経営大学院卒業、マッキンゼー・アンド・カンパニー米国ニュージャージーオフィス勤務。2008年世界保健機関 (WHO) ポリオ根絶イニシアティブ、医官。2014年世界保健機関 (WHO) ポリオ根絶イニシアティブ、チームリーダー (イノベーション・製品開発)。2017年世界保健機関 (WHO) メコン圏マラリア撲滅計画コーディネーター。2019年～世界保健機関 (WHO) 西太平洋地域事務所 (WPRO) 高齢化担当コーディネーター。

#### ―医学を専攻して考えた「私が本当にやりたいこと」

父も祖父も医師でしたから科学の知識と技術で人を助けることができる医師に漠然とした憧れを持っていました。幼稚園から慶応で受験に左右されることなくのんびり過ごしていましたが、高校時代に周りの友人や先生の応援もあって無事医学部に進学できました。大学時代に英語のディベートをしていたこと、短期の語学留学や交換留学プログラムで海外に行く機会があり、将来海外で勉強したいという気持ちがあり、医師免許取得後、研修先に在沖縄米海軍病院を選びました。ここはアメリカの病院として運営されており、アメリカに将来留学したい人の登竜門になっていました。5人いた日本人の同僚のバックグラウンドはさまざま、社会人経験を積んでから医学部に入り直して医師になった方、大学医学部助教 (当時) からアメリカで専門医になるために来ておられる方、価値観もさまざまで随分影響を受け「自分は本当に何がやりたいのだろう」と考えるきっかけになりました。

#### ―マッキンゼーからスタンフォード留学、WHOでインターンを経験

インターンのときに、マッキンゼーのコンサルタントの方が書かれた「経営の考え方をつかって病院経営を改善する」という日経ビジネスの記事を読んだことが大きな転機になりました。もともと医療の社会的側面、医療経済、公衆衛生に興味がありましたが、小泉首相就任前後の当時、規制改革、官から民へと言う時代の流れがあり、病院経営にも民間企業のアプローチが有効なのではないかと考えてマッキンゼーを受けて採用されました。

2000年から3年間東京オフィスで働き、その後会社の留学制度をつかってスタンフォード大学経営大学院に留学しました。医学部では経営について学ぶ機会がなかったので、いつか海外で経営学、経営理論を体系的に学んでみたいと思っていました。

英語力の差を痛感しながらも、スタンフォードの先生方はプレゼンテーションに優れている方が多く (学生からの評価も厳しい) 刺激になりました。世界中からさまざまなバックグラウンドの同級生が来ていて、視野を広げる意味でも留学してよかったと思います。

当時ポスト9.11のスタンフォード大学の先生や同級生の大きな問題意識は、テロの解決のためには、戦争ではなく、貧困や医療、教育など世界の課題解決が不可欠だということでした。そのような雰囲気の影響され、私も国際保健の世界を見てみたいと思い、WHO本部の結核対策の部署でインターンをすることにしました。

(続きは [https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role\\_model/](https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role_model/) でお読みいただけます。)